

山口 繁太郎(やまぐち・しげたろう)

1、プロフィール

ジャーナリスト・編集者・出版人。昭和 16 年京都で山口書店を創業。棟方志功と親交が深く、昭和 17 年に棟方初の随筆集『板散華』を出版。

戦後「京都新聞」「京都日出新聞」を発行。

<生没>

1909(明治 42)年 10 月 20 日 ~ 1966(昭和 41)年 6 月 1 日

<代表作>

弘津正二著『若き哲学徒の手記』・棟方志功著『板散華』(ともに昭和 17・山口書店)「京都新聞」「京都日出新聞」

<青森との関わり>

南津軽郡金田村新屋町(現平川市)生まれ。長兄の山口末作は戦後、青森県議会議員。

2、作家解説

明治 42(1909)年 10 月 20 日、南津軽郡金田村新屋敷(現平川市)、小作人の三男坊として誕生。生後すぐ父を亡くし、母と兄に育てられた。兄・末作は大正 14(1925)年より組合を組織し農民運動に奔走、戦後は社会党議員として昭和 38(1963)年から県議会で二期、県政に参画している。繁太郎も戦前から労農運動に参加、青森から東京、京都大学消費組合へと移り、そこで教授たちの論文出版を手がけて信頼を得て昭和 16 年 12 月京都市左京区一乗寺に山口書店を創業する。棟方志功との出会いは、長部日出雄著『鬼が来たー棟方志功伝ー』〈夢と現実〉の章に、昭和 14 年夏、青森市成田本店での棟方の油絵個展の時だったとある。繁太郎は昭和 17 年 6 月、弘津正二著『若き哲学徒の手記』を、同年 11 月棟方の随筆集『板散華』を編集、刊行した。『板散華』は棟方が「板画宣言」をしたことで有名な処女随筆集で、棟方の作品と思想を広く世に知らしめた。『若き哲学

徒の手記』は特にロングセラーとなり、戦後、講談社学術文庫で復刊されている。終戦後まもなく繁太郎は「夕刊京都」を発行するが数年後「京都新聞」に併合され、新たに昭和34年11月、「京都日出新聞」を発行。新聞社社長は繁太郎、取締役のひとりが棟方だった。生活・教養など文化面を充実させた紙面は好評だったが二年で廃刊。繁太郎は昭和41年に亡くなった。棟方が恩人の名を彫り込んだ「柳仰坂画柵」(昭和26年)には柳宗悦や大原孫三郎などと共に繁太郎の名もみえる。志功との親交は深く、青森では椿旅館と一緒に宿泊、繁太郎の生家にも立ち寄り、京都へ来れば山口邸に滞在し、そのたび絵を残したため山口家は棟方作品コレクションでも知られていた。繁太郎の病气入院をきっかけに建具に直接描かれた肉筆彩色画や、「二菩薩釈迦十大弟子」の改刻前の二菩薩図、京都で制作する志功の映像など、貴重な作品や資料が多数あり、それらは平成22(2010)年三重県のパラミタミュージアム(財団法人 岡田文化財団)に収蔵され、一般初公開された。